

広津柳浪の怪物

——『変目伝』における身体・戦争・衛生・下層

高 橋 敏 夫

怪物の言語、怪物の政治

広津柳浪の怪物は、むごたらしい。二重、三重にむごたらしい。

広津柳浪の怪物は、その造形においてむごたしいばかりではない。周囲の「尋常」の秩序によって、笑われ、軽んじられ、あざけられ、遠ざけられ、……くりかえし、くりかえし、むごたらしい仕打ちをうけるのだが、それだけでもない。

広津柳浪の怪物は、怪物を怪物でなくする可能性をもった「下層」をみずから裏切ることによって、いっそう怪物化するむごたらしい怪物である。「尋常」の秩序からも「下層」の共同体からも孤立化し、宙づりになった怪物の、帝都東京の街々を迷走する姿はむごたしくも、かなしい。

さらに、広津柳浪の怪物は、指摘されるたびに「片輪者」「不具者」「畸形」、あるいは「白痴」といったむごたらしい言葉を、その孤立した身体の上に堆積させてきた。「広津柳浪の怪物」論史は、まことに残酷な差別表現の歴史であった。これまでの広津

柳浪論のほとんどに、公然と、そして平然と書き込まれてきた残酷な差別表現に、現在にいたってなお驚かない者を想像することはむずかしい。しかも、広津柳浪の怪物は登場以来ずっと、「不具者は不自然だ」「片輪者は誇張だ」といった表現のもとにおかれ、「尋常」の秩序を「自然」とみなす者たちの議論に奉仕することを強いられてきたのである。

辞書的には正体のわからない、あやしい、したがって異能をもつ生き物とされる「怪物」は、もちろん、そのような属性を實體として所有するのではない。怪物はみずからを「正体のわからない、あやしい、異能をもつ生き物」と認知しはしない。

いうまでもなく、怪物は、怪物を嫌悪し恐怖する秩序によって、生みだされる。秩序を形成する認知の体系および価値体系、さらには身体の体系によって、「正体のわからない」あるいは「あやしい」とされたとき、はじめて異能をもつ怪物は誕生する。したがって、怪物の怪物度は、秩序を形成するさまざまな体系の強度に正比例するといつてよい。怪物の過剰なむごたしさは、怪物

を生みだす秩序の過剰な恐怖にもついているのである。

怪物は、怪物を生みだす秩序のありかたを、その否定あるいはそこから逸脱をつうじて、あざやかにうつつしだす。だから、秩序が怪物を生みだすというよりは、怪物こそ秩序をあきらかにするといったほうがよい。

しかし、これは、秩序にとつてみれば、みずからを認知するために「怪物」を必要とし、また活用しようということである。さらに掘り下げれば、秩序は、そもそもその形成の瞬間から他者としての「怪物」をたずさえているともいえる。E・サイードの『オリエンタリズム』は、「怪物」論の観点から、西欧の「オリエンタル怪物」形成史と読み替えることができるだろう。

だとすれば、問題はこうなる。怪物をそのまま維持することで、秩序の維持に奉仕するのか。または、怪物のすべてをくまなく明視しつつ、その怪物をとおして秩序のありかたを暴露し、怪物が怪物でなくなるあたらしいポリフォニックな社会を構想するのか。このことは同時に、「怪物」という言葉を有する言説の秩序のありかたを暴露して、怪物が怪物でないあたらしいポリフォニックな言説の世界を求めることでもある。

このとき、「怪物」というステージで、非和解的な政治が交差し、闘争が開始される。まさしく、怪物をめぐる政治であり、怪物をめぐる闘争である。

広津柳浪の怪物は、たしかに怪物的である。怪物を産出する秩序の恐るべき姿をあざやかにうつつしだす、そうした怪物らしい怪物なのである。

怪物とは、あくまでも関係概念としてとらえられねばならない。⁽⁴⁾「片輪者」「畸形」「一寸法師」「不具者」「白痴」といった言葉にぬりこめられた広津柳浪の怪物を、怪物的な実体から引き離し、関係としての怪物へとかえしてやろう。秩序との関係の場にもどされた怪物は、かならず、みずからを生みだした秩序を、解体されるべきもうひとつの怪物的環境として、はつきりと指し示すはずである。怪物のもつこのような変更的性格をさして、かつて花田清輝は「怪物には未来がある」といつたにちがいない。

「尋常（ひとなみ）」の身体秩序

秩序が怪物を産出するとはいえ、秩序はさまざまな体系・序列の総体としてある以上、怪物の産出もまた、さまざまな体系・序列の総体としてとらえられねばならない。

広津柳浪の「変目伝」は、こうした怪物の産出をほぼあますところなくとらえた物語といつてよい。その意味において、広津柳浪が同時期に発表したいくつかの怪物の物語、「黒蜷蜒」（二八九五年五月）、「亀さん」（同年十二月）等のいわゆる「悲惨小説」のなかで、「変目伝」は際立ったものになっている。

物語は冒頭から、いくつもの序列をあからさまに示していて、その複雑な組み合わせの、「上と下」の落差に読者はめまいを強いられるにちがいない。たとえば、「いと材低く小柄なる男」の出現による身体の序列、「変目伝」と称される傷痕の有る無しの序列、店の小僧と番頭、そして別の店の主人との屈折した主従の序列⁽⁵⁾、差し出された銅貨をめぐる金銭の序列、評判娘お浜とお浜

に執心する伝吉との醜の序列、洋酒店で成功するという文明開化の序列、現金の蓄えによる貧困と富有の序列、嫁迎えを当然とする「世間体」の序列、おなじく独り身ではむずかしい家形成の序列等である。これらの序列には、「上から下へ」「優位から劣位へ」の排除のまなざしが顕在、あるいは潜在しており、それが「怪物」の像をうかがあがらせるのである。

これらの序列のなかで、もつとも目をひくものは、やはりなんといつても、身体と傷痕をめぐる序列である。まず、ここから考えてみよう。

広津柳浪の怪物のなかで、もつとも怪物的な怪物である伝吉を、物語はつぎのように描きだしている。「身材いと低くして、且つ肢体を小さく生れ付たり。ゆきは六寸五分、丈は三尺一寸、其にても尚ほ踵を掩すばかりなる着服は、羽織にも好みて赤出の唐棧縞を用ゐ、常に手を懐にし、駒下駄突掛て、ちよこちよこ小走りに歩める様、往来の人目を惹けば、口悪善なき童等は、蜘蛛男又は侏儒と綽名し、彼を見るごとに、興ある事にして打ちはやす。顔は丸顔にして、鼻は形よく、口元に愛嬌あれども、左の後背より頬へ掛け、湯傷の痕ひつゝりになりて、後背を堅に斜めに釣寄せ、右の半面に比ぶれば、別人なるが如く見ゆ。此にぞ、変目伝の綽名は付られける。慇とらしく笑を含めば、厭ふべき目付いとど気味悪く……」。

ここからもあきらかなように、伝吉の身体の「異形」とは、目のまわりの傷痕と、身体の「ゆきは六寸五分、丈は三尺一寸」というスケールからなる。加えて、この身体の、「ちよこちよこ」

と執拗に修飾される独特な歩行である。

これらはたしかに独特な身体であり、身振りだろう。しかし、これだけでは、笑われ、あざけられ、遠ざけられる理由にはならない。もしなるとすれば、こうした独特な身体と身振りを、「普通の身体と身振り」から外れた「劣位」のものとして排除する秩序（体系）がすでに形成されていることを物語るだろう。その排他的な秩序こそ、この物語では、「ひとなみ」というルビをふられた「尋常」の身体秩序なのである。「尋常」に対応するのは「ひとなみならぬ」とルビをふられた「不具」である。

隠された「身体」

「尋常」の身体秩序がどれほど物語に浸透しているかを確認するには、この物語において身体のスケールが報告されるのが、ただ伝吉のみであることに目をむける必要がある。他の登場人物の身体のスケールはまったく語られないし、身体の他のありかたもほとんど示されないものである。例外的に、伝吉を魅了するお浜の「十人並みに勝れ」た容姿と、殺害された坊主の逆さ吊り死骸がわずかに示され、そして伝吉に殺された質屋の番頭常蔵が「大男」と事後的に告げられるのみである。

いったい、他の主要な登場人物たちの身体のスケールとその特徴はいかなるものなのか。物語が語らないだけでなく、かつての読者もいまの読者もそれに関心をむけることはまずない。そして、そのことの奇妙さを問うこともないのである。

この物語においては、語り手と登場人物たちに「尋常」の身体

秩序が共有されているばかりか、読者もまた「尋常」の秩序の仲間であり、共犯者であることが求められているのである。そして、「尋常」に「自然」をあてはめれば、伝吉の造形を「趣向」的な「不自然」性の突出とみなした多くの論者たちにもまた、この「尋常」の秩序はあらためて確認するまでもない、自明のものであったのである。

「尋常」の身体秩序を前提とした物語にあつて、「尋常」の身体は描かれないでも「尋常」にイメージしうるものとして存在するがゆえに、非「尋常」の身体のみが描かれる。非「尋常」の身体を残酷なまでに克明にとらえる物語のまなざしは、みずからを圧倒的な多数派として自認する「尋常」の身体のまなざしなのである。そして、この物語にとどまらず、なにか特別な事情がないかぎり、すべての登場人物たちの身体が克明に描かれることは、近代小説のはじまりから現在にいたる、これまでの小説の歴史においてなかつたことを考えれば、「尋常」の身体秩序は、小説の「標準」をつくりあげる重要な要素になっている、といつてよいだろう。

あるいは、ここに、亀井秀雄の指摘する身体における「顔」の特権性¹⁰をかわらせる必要があるかもしれない。亀井は、「当世書生氣質」や「浮雲」など近代文学を創始した作品によって初めて顔への関心が始まった、としたうえで、その理由として「顔とは自意識の身体的な部位」であることをあげている。身体は「心」に関係する部位が優先されるといふことである。

心または精神を上位におき、身体を下位におくというのが、西

欧近代の心・身論だとすれば、それを文学として移入しようとした近代文学にあつて、心または精神によって身体を分割し序列化することは当然であつただろう。

「変目伝」においては、この心・身論がよりあからさまに露顯する場面がある。お浜の兄であり、伝吉の支援者にして理解者である勝之助は、「あの正直な人」と心的な伝吉を褒めたすぐあとで、「一寸法師^{いんぽうしやう}だとか、変目伝^{へんめくでん}だとか縛名^{ばくな}をつけられて居る人^{ひと}と、馬鹿^{ばか}な評判^{ひやうばん}でも立ちや、それこそお浜^{おはま}は一生^{いっしょう}廃人^{はいじん}同様^{どうよう}になるのだ」と身体的な伝吉を切つて捨てて。勝之助の言葉は、心・身の区別と優劣をはっきりと示している。伝吉に近代的な商業のノウハウを教える有能なブルジョアの主体である勝之助はまた、心・身論における近代的な主体でもあつた。伝吉がひきおこす身体と傷痕の悲劇が終つたのち、主たる視点人物として登場する勝之助は、「事件」を解釈し、理解し、整理することに終始する。身体なき「解釈」機械としての近代的な主体を勝之助のうちに確認しておこう。

近代は身体を下位において抑圧する。しかし、これは「尋常」の身体を無化するのではない。むしろ、身体を抑圧するためにこそ、「尋常」の身体という擬制の秩序がもとめられるのである。「尋常」の秩序のなかにいる者には、秩序を問ひなおすことはきわめてむずかしい。身体に触れず、身体を感じないでいられることは、「尋常」の身体秩序の制圧ゆえなのである。それがはつきりするのが、「変目伝」という物語において、非「尋常」の身体があからさまな姿形で登場し、つよい「身体感」を表出したとき

だったのである。⁽¹²⁾

日清戦争下の反「兵士の身体」

だがそれにしても、この「尋常」の秩序とはいったいなにか。これを同時代の身体のアベレージにもとめることはまちがいでないが、人はつねにアベレージのなかに身をおくのではないとすれば、この「尋常」には個々の経験をこえたなんらかの制度性がいかにえれば、歴史的な制度性がうかがえるのである。

伝吉は物語では二七歳になる男である。この年齢からみて、物語が、伝吉に「明治」という時代の歴史をかさねていることはあきらかであろう。明治国家のスローガンは「富国強兵」とりわけ「強兵」であった。「明治」の身体、同時代における基準（多分に理想化された基準）は、「兵士の身体」であり、欧米人の「肥大にして強壯な体格」に打ち勝つ闘争の身体であった。⁽¹³⁾

「兵士の身体」が決定されたのは、いうまでもなく、一八七三年の徴兵令である。「第三章 常備兵免除概則」には、まず「第一条 身ノ丈ケ五尺一寸未満者」とあり、次に「第二条 羸弱ニシテ宿痼及ビ不具等ニテ兵役ニ堪ザル者」⁽¹⁴⁾とある。

「国民皆兵」という理念を掲げて出発した徴兵令によって、「全国四民男児二十歳ニ至ル者」（徴兵告諭）すべての身体は、五尺一寸（後に四尺八寸となる）を境に、国家と皇統に奉仕しうる「国民」的な身体と、それが不可能な「非国民」的な身体とにはつきりと区別されたことになる。⁽¹⁵⁾ 背のたんなる目盛り上の区別、そして病氣および「障害」の有無が、国家を媒介として、差別す

る身体と、差別される身体とをうみだしたのである。ここで、男が「国民」であり「身体」の所有者であったことは確認しておいてよい。

そして、この物語が登場する一八九五年二月、国家によってなされた身体分割、序列化はその成果を具体的な戦闘のなかで具体的に問われ、すでに勝利の最終局面をむかえていた。「国民」的な身体が、「帝国」の身体への飛躍をかけて、膨張する幻の版図において展開していた、といってよいだろう。「明治」の身体、⁽¹⁶⁾「強兵」の身体、その時点までの最大の総括こそが日清戦争にほかならなかった。

「挙国一致」のスローガンのもとに遂行された戦争において、「国民」的な「強兵」の身体が、最大級の賛辞と感謝と敬意をあつめ、明治の身体総括を着々と進めているまさにそのとき、笑われ、遠ざけられ、気味悪がられ、嘲られるという、「ゆきは六寸五分、丈は三尺一寸」、二七歳になる伝吉の「非国民」的な身体⁽¹⁶⁾の総括の物語があらわれるのである。おそらく、これは偶然ではないだろう。そして、物語の外と内とにまたがる同時代的なコンテキストでの、このするどい対立のなかでは、伝吉の身体は、さらに、つねに「ちよこちよこ」と形容される歩行の身振りは、非「兵士の身体」をこえて、ほとんど反「兵士の身体」にまで突出している、といえよう。

この物語に、まったく戦争の熱狂が流入していないことは注目すべきだろう。テキストはそこに語られることにおいて、他のテクストとの相互性を指示することもあるが、また、そこに不在な

ものによって、他のテクストにむかつてひらかれていることもある。「伝吉の身体」というテクストは、戦闘をする「兵士の身体」というテクストと関係する。いや、この物語に「兵士の身体」がまったく不在であるわけではない。戦闘し、勝利する「兵士の身体」であり「国民の身体」である身体こそ、物語における特権的な「尋常」の秩序の、全部ではないがその一部を形成するものであった。

このテクストには、同時代の戦争の空間を可視的に遮断して、「兵士の身体」とは相反する一人の男の身体の、暗い総括の空間があるといつてよいだろう。

「衛生」の権力

ある特定の空間に物語を閉じていくことによって、一見、同時代的なコンテクストを廃棄するようにみえながら、じつはよりつよく同時代の中心的傾向を相対化してしまうテクストといえ、広津柳浪のいわゆる「悲惨小説」全体にいえるばかりか、吉原遊廓にステージを限定した「今戸心中」（一八九六年七月）にもいえるにちがいない。そしてさらに視野を拡大すれば、一八九五年、九六年に文壇で流行した「狭斜小説」にも、それは共通するだろう。

「変目伝」をはじめとするこれらのテクストは、あきらかに日清戦争（前後）の空間を意識し、それを絶対化するのではなく相対化するという意味において、日清戦争の「戦中文学」であり「戦後文学」なのである。

日清戦争は当時、福沢諭吉が指摘したように、「文野の戦争」と認識された¹⁸。すなわち、文明世界に属し文明の誘導者である日本と、文明の進歩を妨げようとする野蛮な劣等民族である清国人との戦争であるとされたのである。

このような「野蛮」に対抗する「文明」という図は、日本の「われわれ」意識を強化していく。しかしそれは、「われわれ」内部においてもいぜんとして課題でありつづけていたといつてよい。国内の「文明」と「野蛮」の闘争である。

この闘争の中心に「衛生」という権力があつたことは、近年、歴史学の安保則夫、成田龍一、奥武則等によってあきらかにされつつあるが、病死者が戦死者を圧倒的にうまわった日清戦争は、「われわれ」内部での「衛生」の権力の必要性を高めた戦争でもあつた。この時期に、国家的な「衛生」の権力によって、たとえば学校での身体検査、椅子や机の高さの標準化等がはじまり、「身体的な規範」や「標準的な身体像」がつくられ、それにとりなつて差別や排除がおこなわれるようになった、と成田は指摘している。そして、以前にもまして「スラム」や「娼婦」が「衛生」のまなざしによって対象化され、排除されていく¹⁹。

「衛生」の権力によって、標準外の「身体」、「下層民」、「娼婦」が、「怪物」化されていくのである。広津柳浪はこれらの怪物をつぎつぎにとらえていった、といつてよいだろう。

「変目伝」における「尋常」の身体秩序は、「兵士の身体」であるとともに、「衛生の身体」でもあつたにちがいない。

「傷痕」の序列化

とはいえ、伝吉は、「ゆきは六寸五分、丈は三尺一寸」の身体
の所有者であるだけではない。「左の後背より頬へ掛け、湯傷の
痕ひつりになりて、後背を堅に斜めに鈎寄せ、右の半面に比ぶ
れば、別人なるが如く見ゆ。此にぞ、変目伝の綽名は付られける
態とらしく笑を含めば、厭ふべき目付いと気味悪く……」という
傷痕の持ち主である。「尋常」の秩序は、この両者を場面に応じ
て、「一寸法師、蜘蛛男」と「変目伝」とよびわけている。物
語において、「一寸法師、蜘蛛男」と「変目伝」とはほぼ同じ回
数あらわれているにもかかわらず、では、なにゆえに、物語は
「一寸法師、蜘蛛男」ではなく、「変目伝」となづけられねばなら
なかったのだろうか。

「顔とは自意識の身体的部位」（亀井秀雄）であり、伝吉の顔に
傷痕を残すことは、「一寸法師、蜘蛛男」に増して伝吉を「尋常」
ならざる場に追い込む。身体のスケールばかりか、もつとも大切
な「顔」が「変目」なのである。「顔」の近代小説における特権
性——このように考えることも可能だろう。

しかし、この「傷痕」には、いっそう重大な問題がはらまれて
いるのである。

物語の冒頭近く、伝吉が唯一頼りにし、日々孝行を欠かさない
老母が、執拗に伝吉を論ず場面がある。ここ三年ばかりずつと言
いつづけてきた、伝吉の嫁迎えのことである。「だって、慈堂。
私の事を世間ぢや、変目伝だの蜘蛛男だのツて、衆人がさう云

つてるぢやないかね。だもの、此様男を亭主にする女が何処にあ
るもんかね」と、と伏目がちに言う伝吉にたいして、母は励ますよ
うに言う。「本統に私が濟ないのさ。私の過失でお前に湯傷をさ
せて、其様顔に爲たのだから。堪忍してお呉よ。生得の片輪ぢや
あるまいし、顔にひつりがある位は、痘痕から見や、お前何
でもありやしないよ。こんな言葉に伝吉は、ただ笑っているだ
けなのだが、続いて母が、あのお浜さんはどうだろうと言うと、
にわかに顔をあからめる……。

伝吉がお浜に執心していることを示す重要な場面であるとも
に、お浜への執心が「変目伝、蜘蛛男」という障害をこえて実現
するかもしれないという希望を、伝吉にあたえる大切な場面であ
る。

不憫な息子をはげます慈愛深い母、⁽²⁰⁾というにはあまりにむごた
らしい場面ではないか。「傷痕」を無化するのではなく、「傷痕」
を序列化し、よりひどい「傷痕」との比較によつて、この「傷
痕」を救出しようとする。被差別から逃れるのに、みずから差
別する者になることをもつてするのとおなじ、むごたらしいレト
リックがここにはある。もちろん、このレトリックによつては、
伝吉は「傷痕」から解放されない。「傷痕」を「変目伝」と命名
し優位性を確保する「尋常」の秩序のレトリックとおなじレト
リックを承認することによつて、「尋常」の秩序のレトリックを
より強化し、ますます「傷痕」にしばりつけられるしかないの
である。

しかも、ここで重視しなくてはならないのは、「傷痕」を序列

化する際の理由づけである。「生得の片輪」と、「痘痕⁽²¹⁾」とが、「湯傷」の優位性を保証するために「湯傷」の下に組み込まれているのを見ると、傷痕における「人為的なもの」は「生得的なもの」にまさり、「人為的なもの」は「伝染」病によるもの「にまさる、という考えがうかがえるのである。

「生得的なもの」は変更不可能なものであり、「病によるもの」は、さきにも触れた「衛生」に反する非衛生的で不潔なものだとすれば、伝吉は、母の言葉によつて、みずからの「傷痕」という障害を、「変更不可能なもの」ではないもの、「非衛生的で不潔なもの」ではないもの、とする見方を手にいれたことになる。

もちろん、このような「傷痕」の差別化は、もう若くはない息子を心配する老母のほんの思いつき、とみることもできよう。伝吉もこの言葉をそのままうけとっているようにはみえない。しかし、「傷痕」をめぐって語られた、「変更不可能なもの」ではないもの、「非衛生的で不潔なもの」ではないもの、という見方は、「野蠻」という停滞を撃ち「不潔」と「病」を撲滅しようと、必死になって文明開化をすすめる近代国家の理念そのものではないか。

「下層」への裏切り

しかも、そのような見方に共通する「人為的なもの」の優位性こそ、じつは伝吉みずからが「身を粉にして」実践してきたことでもあったのである。

物語は、伝吉が幼少の頃から、「尋^{じこ}ならぬ」身体の小ささと傷

痕によつて周囲から除け者にされ、侮られ、軽んじられ、罵られてきたことを告げたのち、その「口惜さ」をばねに奉公先で身を粉にして働き、朋輩五人あるなか、いちはやく独立したことを語る。伝吉は、「身体」の現状という変更不可能なものを打ち消すように、「人為的なもの」としての日々の労働を黙々とつづけるのである。

伝吉の奉公先が「洋酒問屋」であり、独立したのが「洋酒屋」であることは、はなはだ象徴的だろう。⁽²²⁾ 伝吉の実践は、文明先進国である西欧にむかつて「人為」を総動員する国家の「近代」を、ほとんどそのままなぞっている、といつてよい。

だから、「生得」の片輪⁽²³⁾やあるまいし、顔^{かたは}にひつ、りがある位は、痘痕^{じやうこん}から見りや、お前^{まへ}なんでもありやしないよ」という母の言葉は、母の思いつきというよりは、むしろ伝吉のそれまでの実践をいいあてた言葉なのである。あるいは、伝吉の実践が、母からこのような言葉をひきだした、ともいえようか。したがつて、この母の言葉は、伝吉に、これまでの実践どおり努力すればお浜を得ることもけつして不可能ではないという考えを顕在化させたことになる。⁽²⁴⁾ 伝吉の悲劇は、ここで決定的なものとなる。

もしも「一寸法師、蜘蛛男」にとどまれば、伝吉の悲劇はなかったかもしれない。「変目伝」という「傷痕」をめぐつて、序列化をはたしたとき、伝吉は、質屋の番頭殺しという悲劇から外れていく道をふさいで、悲劇にむかつて一直線に走るしなくなるのである。悲劇の物語が、みずからを「変目伝」となづけた理由⁽²⁵⁾はここにある、といつてよい。

もちろん、「一寸法師、蜘蛛男」にとどまり、傷痕を傷痕と受けとることがそのまま、日々の差別からの解放につながるわけではない。それはじゅうぶんにもむごたらしい。しかし、その差別をこえるのに、差別の序列を上位にのぼることによつてはたそうとするのは、さらにむごたらしい。

第一に、それは差別の超克ではなく、差別を肯定し、むしろ差別の現状の強化につながるからである。

第二に、差別され、排除される「下層」からの離脱は、「下層」への裏切りをかならずともなつてしまふ。それが、ここでは「生得の片輪、痘痕」を切り捨てる残酷な表現になっているのである。さらに、伝吉をまえにしての老母の言葉には、「大きな体格」の「土方、人足」といった「人に使役^{つかは}れている」貧しい者たちの切り捨てがみえる。かつて伝吉もその近くにあつた「下層」への裏切りである。

「下層」を社会的な怪物とするなら、伝吉は社会的な怪物から、孤立的な、それゆえもつとも過酷な怪物的扱いをうけるしかない怪物へと、むごたらしい変形をはたしてしまうのである。

迷走する「物語の怪物」

そして、第三に、差別がもつとも激しくなるのは差別者に近接した場なのである。伝吉は「人為」の不断の行使によつて、差別をうける「下層」から、差別者のすぐちかくまで上昇していったことになる。それは同時に、伝吉の身体と傷痕が、「尋常」の身体秩序の境界に接するか、または秩序のなかにはいりこんでしま

うかであつて、それゆえに、いつそはげしい差別をまねいてしまふのである。

物語冒頭の、「やあ変目伝さん」というよびかけが、店番の小僧三吉によつてなされていることを見逃してはならない。物語のなかで「一寸法師、蜘蛛男、変目伝」をもつともいいたてゐるのは、「小僧、下女」である。これを「下層」を裏切つて上昇した者への、「下層」からのひきもととしてみてもよいし、「上層」の境界近くにいると思ひこんでいる者からの排除とみてもよいだろう。

しかし、そうした人々をはるかにうまわる、残酷な差別と排除をおこなうのが、薬種店経営者勝之助の従弟で、若者番頭がわりとして修業^{しゆぎょう}をしている定二郎である。定二郎は、「一寸法師、蜘蛛男、変目伝」と伝吉をあざわらいつつ、お浜とのあいだを取り持つと伝吉をあざむいて金をせびり、ついには伝吉を悲劇に追ひこんでしまふのである。定二郎が、「上層」を約束された、いまは境界近くにいる者であることはいうまでもない。このような者こそ、みずからの位置確認のために、境界付近にたえず目を配り、「他者」である怪物を摘発するのである。のちに定二郎は、伝吉を悲劇に追ひこんだことを認め、反省することによつて、もはや差別や排除をとりたてて意識しなくてすむ「上層」本体への昇格を確実なものにする。悪いことはしたがのちに反省した、のではない。差別と排除の実践をしても「反省」すればすむといった、実践の「心」的な解消をはかる近代的な主体があらわれているのである。まことに、おそるべき主体ではないか。

伝吉みずからまねきよせてしまふ差別や排除の暴風にたいし、

孤立化した伝吉は誰を頼りにすることもできない。伝吉とともに上昇した老母は、「上層」および「尋常」の秩序でのいつそうの上昇を願っている。これまで世話になってきた勝之助に、金策のうえで頼ろうとしてもついに実現できない。この勝之助の件は、ストーリー上の仕掛けをこえて、「尋常」の秩序と「上層」による差別と排除の猛威をのがれることは、その住人の手助けによって実現しえないことを物語が語ろうとしているようにみえる。

孤立化した伝吉は、ただ「金銭」の力でもって、差別や排除と応戦を試みる。冒頭、小僧三吉に「やあ変目伝さん」とよびかけられた伝吉が、白銅貨一枚を投げ出して、にやにや顔を三吉にむけるところからはじまる「変目伝」は、また、「金銭」の物語でもある。伝吉は差別と排除を「金銭」の力で動かそうとして、結局は「金銭」によって破局へと拉致されてしまう。「金銭」は差別や排除を拒む力ではなく、「上層」と「尋常」の秩序を支える力なのである。

質屋の番頭を殺した伝吉は、物語の語り手から「何とか思ひけん」「何とか思ひけん」と、くりかえし「他者」化されて、いよいよ「怪物」化し、人力車にのって水道橋から上野に向かい、荻坂下より王子をめざし、白山から板橋に転じ、今度は早足で、染井の共同墓地、王子道へ、再び人力で飛鳥山へ、再び早足で滝の川へ、鉄道の停車場では熊谷までの切符を買うが、人力で道灌山下へ、早足で日暮里、谷中墓地、そして上野の山の中に……。

孤立化した「怪物」が、その孤立と、行方の喪失を、街のなかに刻みこむようにして走る姿は、ほんとうにかなしい。じつをい

うと、わたしと「変目伝」との最初の接点はこの場面にあった。怪物のかなしい迷走を「怪物の未来」へと接続すること、これがわたしの「変目伝」へのかかわりの中心だったといってもよい。

しかし、いまあらためてこの迷走の場面にふれてみると、怪物の姿にはかなしさばかりではなく、怪物を生みだす秩序のむごたらしさを、怪物の自滅によってさししめすという仕事をやりおえたあとの、ある種の安堵感のようなものが漂っていないでもない。ほんとうは迷走ではなく、その「身体と傷痕」の、帝都への開放的な散布であり、物語に「何とか思ひけん」という破れ目を持ちこみ、物語の怪物を浮上させようとするしたたかな計略さえ、みえるような気がしてくる。

注(1) 「広津柳浪の怪物」のうち、ここでは「変目伝」(『読売新聞』一八九五年二月四日―三月二日)を論じる。他の「広津柳浪の怪物」

については機会を改めて論じたい。なお、「広津柳浪の怪物」は可視的な怪物にとどまらず、不可視的な怪物もふくむ。柳浪の最初の作品「女子参政賢中様」(『東京絵入新聞』一八八七年六月一日―八月一七日)の、女子参政権を説く「過激」派山村敏子もそのひとり。山村敏子の政治的敗北、失踪ではじまった「広津柳浪の怪物」は、したがって、そのすべてに「政治」(環境)的な敗北の小説的記憶を有している、といつてよい。この怪物の迷走にもまた。

(2) E・サイド 今沢紀子訳『オリエンタリズム』(一九八六年一月 平凡社)

(3) J・クリステヴァ 支倉・木村訳『彼方をめざして——ネーションとは何か』(一九九四年一〇月 せりか書房)

(4) 「変目伝」を「広津柳浪の怪物」と題して論じる理由はここにあ

る。「片輪」「不具」等も本来、関係概念をあらわす言葉であるが、ほとんど実体として流通してしまっているので本稿では使わない。

- (5) たとえば、下層社会の住人たちを「奇々怪々の生活」を送る「野獸」(『平民新聞』一九〇三年一月一〇日)と書く幸徳秋水はまた、『廿世紀之怪物帝国主義』(一九〇一年四月 警醒書店)の著者でもあった。

- (6) 「科学小説」(『花田清輝全集第八巻』一九七八年三月 講談社)
(7) この主従の序列は「会話」のなかでの呼称によって示される。地の文では呼称の序列は消え均質化されている。物語の語り手はこの序列をとらえていたのである。

- (8) 竹内博は「広津柳浪の深刻小説——『黒蟻艇』と明治下層社会」(『文学』一九四九年一月)で、柳浪の悲慘・深刻小説をみわたしつつ、「庶民生活の悲慘さは、不具や容貌の醜悪さとは別に、現実社会において展開されていたのであるから、主人公を強いて作為、扮装する必要はなかった筈だ」と書いている。他の「身体と傷痕の怪物」批判とくらべると、それなりに論理的なものだが、「別に」ではなく「同時に」であること、ここからは「身体と傷痕」という視点が欠落してしまうこと、を指摘しておきたい。

- (9) ただし、「尋常」の秩序は、身体にかかわるものがすべてではない。近代とは、感性、言語、論理、芸術、家、集団、都市等あらゆる領域に「尋常」あるいは「標準」の秩序をつくりあげる運動と定義することができる。したがって、近代は、あらゆる領域に「標準」から外れた怪物を発生させるのだが、ここでは、「変目伝」という物語に突出している、小説における「尋常」の身体秩序と、非「尋常」の怪物を問題にする。

- (10) 亀井秀雄「身体・この不思議なるものの文学」(一九八四年一月 れんが書房新社)

- (11) P・ストリプラスとA・ホワイトは「境界侵犯——その詩学と政治学」(本橋哲也訳 一九九五年三月 ありな書房)で、ブルジョ

ア的主体における「身体」の抑圧と都市「下層」言説の誕生という、じつに興味深い論を展開している。

- (12) 三橋修は「差別論ノート」(一九七三年五月 新泉社)で、近代合理精神とその言語が人固有の身体を隠蔽した、とする。また、岡庭昇は「身体と差別」(一九八四年二月 せきた書房)で、近代の制度によって差別された「身体そのもの」のあらわれとして身体的欠損や奇形はあり、そこに衝動に充ちた存在感があらわれる、と論じている。寺山修司は「畸形のシンボリズム」(一九九三年二月 白水社)において、「変目伝」をとりあげ、平均的身体によって形成された倫理としての日本的近代にあつて、異形はそれになりたい異議申し立てのシンボルであり、「身体感」を表出した、と書いている。本稿は、これらの注目すべき評論から多くの示唆を得た。

- (13) 鹿野正直「桃太郎さがし——健康観の近代」歴史を読みなおす23 (一九九五年一月 朝日新聞社)

- (14) 「軍隊 兵士」日本近代思想大系4 (一九八九年四月 岩波書店)
(15) 立川昭二「明治医事往来」(一九八六年二月 新潮社)の「体格検査」で、「いっぱんの人びとにとつては徴兵検査といえは、身長・体重を測定する体格検査であり、それは体力・体格という考えとなり、ひいては近代日本人に健康・体格という思想を根強くつくっていく結果となつた」と指摘している。

- (16) 広津柳浪には、周知のとおり、「非国民」(「文芸倶楽部」一九八七年一月)という作品がある。世界主義にたち日清戦争を攻撃するクリスチャンが、「非国民」とされて、恋人をうしなうとともに教会からも除名されるという物語である。従来、世界主義否定の物語とされてきたが、独り破滅する者によって秩序を暴くという「広津柳浪の怪物」のありかたからすれば、「非国民」である箱崎兼吉もまた破滅的な「怪物」のひとつと読める。

- (17) 宇佐美毅「『今戸心中』論——アンビヴァレントなテクストとして」(『日本近代文学』一九八九年五月)

(18) 「時事新報」 一八九四年七月二日

(19) 成田龍一「都市・衛生・女性」(「都市・空間・建物の根拠をさぐる」 一九九一年二月 飛島建設開発事業部)

(20) 「めざまし草」(一八九七年一月)で「慈愛深き伝吉が母」と評されている。いままで「母」についてふみこんだ論及はなかった。

(21) 「痘痕」天然痘は、すでに強制種痘の制度が設けられていたにもかかわらず、一八九二年、九三年に明治にはいつて三度目の大流行があり、多くの死者がでた。

(22) 中丸宣明は「供養の文学——広津柳浪論」(「国語と国文学」一九八四年三月)で、「伝吉は暴力的なまでに生活空間を侵してきた西欧化」近代化そのものの形象」としている。中丸の論文は、同時代の「貧民窟」の変容と「変目伝」とのかかわり、伝吉と定二郎を対としてとらえるなど創見にとむが、伝吉をはじきとばす「共同体」が抽象的で、「近代」との関係が不透明である点、また、この

時期の柳浪が「共同体」の立場に立つとする点等は再考されるべきだろう。

(23) 塚越和夫は「変目伝」の成立(「日本文学」一九六八年八月)で、柳浪は「変目伝」で、それまでの諸作品で完成されていた「愛欲→堕落→破滅」という図式を反復した、としている。しかし、この物語では、「愛欲」にいたるまでの上昇、裏切りにこそ、「破滅」ははらまれていたのであり、「愛欲」が物語を動かす力の中心ではない。

(24) このような社会的な怪物としての「下層」、社会的に差別され排除されるさまざまな人々の総体としての「下層」の可能性については、同時代の「最暗黒」貧民・棄民」論もふくめて、「広津柳浪の怪物」の別の物語である「黒蟻艇」等をめぐって具体的に検討する予定である。

新刊紹介

細谷 博著

『凡常の発見 漱石・谷崎・太宰』

本書では繰り返して「凡常」、「平凡」、「普通」、「日常」といった言葉が作品論を展開する際の重要な用語として持ち出されてきている。冒頭の「凡常の受けとめ」という文章において「凡常」という言葉を重視する所以が述べられるものの、何時の、

何処での、誰にとつての「凡常」「日常」

なのだろう。

「普通」「平凡」なのは全く明らかにはされていない。そういう意味では本書の読者には戸惑いを感じ続けることになる者が多いのではないかとも思われる。しかし、そのような論じ方によって文学研究という「せまい」場の風穴を開ける可能性の探求が目指されることになっていゝのである。それは、「凡常」といわれる境地を感得でき、「作品」を疑わず、自分の「読み」に執着できる論者によってのみできる論法

(平8・2 明治書院 B6版 四六九頁 三六〇〇円) 〔神谷雅志〕